

「錯綜体」としてのヤンバル

—移動・記憶の抑圧と解放に関する一試論—

桃 原 一 彦

Yambaru as "*implex*"

— An Essay about Suppression and Liberation of The Migrations and Memories —

Kazuhiko TOHBARU

本稿では、筆者がこれまで論稿等と言及してきた那覇および関東大都市圏における沖縄出身者の生活と語り、そして筆者も含めた移動と記憶によってヤンバルを錯綜体としてとらえて記述していきたい。錯綜体という概念の定義については後述するが、ひとまず空間的・歴史的に閉じることなく、そして記述主体である〈わたし〉を閉じることなく、その場所性や解放性そしてあらゆるジレンマが交錯するところの領域化とでも言うておこう。

しかし、これらの記述作業を開始する前に少し厄介な問題を投げかけておかねばならない。それはヤンバルを対象化つまり他者化し、記述することの政治性についてである。

ヤンバルを「書く」ことの政治

社会文化研究本号における小特集「ヤンバルに学ぶ」というテーマから思考し、エクリチュール（書くという行為）をはじめようとしたとき、整理しておかなければならないことがいくつあるだろう。まず、ヤンバルという対象構成と、それをまなざす〈わたし〉を問うこと。次に、ヤンバルに「学ぶ」という行為を問うこと。そして、ヤンバルについて「書く」という行為について問うことである。じつはこれらの問いを一つひとつ取り上げ、それぞれについて記述するだけでも膨大な思考作業と紙幅を要するはずである。しかし、この3つの企て開始作業（おそらくそれに限定されない）だけに執筆を費やしてしまうと「小特集」という形象から逸脱してしまうため、ここでは雑感めいた問題提起をすることに留めておきたい。

なぜ、このようなシンドイ思考と記述の作業を開始点として掲げなければならないのか。つまり、とりあえずの暫定的な始まりとして、まずヤンバルを既知な対象として記述することから始めてもよいのではないか。それに即答するならば、ノンである。やはり、ヤンバルは〈わ

たし)との関わりのなかで記述せねばならない。

それは、筆者が「社会学」という道具を手に入れ、「踏査」という行為のカノンが保証された1998年(沖国大非常勤講師に就いて社会学実習ゼミを担当した年)に端を発している。筆者は98年から旧社会学科の2年ゼミ学生を引率指導するかたちで名護市をフィールドとし、さらにその後、『名護市史』の社会文化編の編著者として聞き取り調査のため市内を東奔西走した。だが、98年からの5年間、名護市をはじめとしたヤンバルの山々を横目に見ながら、つねに身の奥底に洶涌とした苦汁を感知し、足枷がついて廻るかのように「社会学者」というわが身を顛倒させられる思いがあった。

この感覚はどこからきたのか。その3年ほど前、筆者が大学院在籍時に東京に居た95年10月、「本島北部」で発生した少女に対するあの事件がそうだ。そして、本学がへばりついているあの普天間基地が「合意」のもとに進められようとしている、「本島北部」への移設計画地のあの山海がそうさせるのだ。筆者にとっては、目の端に映る「レンジ」と書かれた立て看板の砂利道も、リーフ外の漆黒の海も、いくつもの鋭い眼差しがこちらを観るかのような木々の闇の奥も、すべてが悲鳴、怒号、絶叫、絶望の光景で止ってしまう。深緑も、コバルトブルーも「美しさ」とか「癒し」という言葉で書き記すことなどできない。強い陽射しの集落でフクギ並木のあいだを手押し車で歩む老女たちも、簡単に「オバァ」なんて表現できない状況にあった。

98年以降、「社会学」という察しのよい解析道具、「踏査」という行為のカノン、そして学術誌に記述できるという権益を得てして、なおもヤンバルの悲鳴や怒号を無視して歩みを進めることができずにいた。「〇〇社会学」というプロパー性を口実に、度外視を決めこむ態度を正当化することはできない。ヤンバルについて書くということには、知識人とか研究者というポジショナリティの要請(社会的抑圧)と同時に、聞き取り・接合することが困難な他者の声に耳を傾け、そこに身をおく(わたし)を記述する覚悟がともなうのではないか。なぜなら、少なくともこの島における戦後の軍事要塞化以降、ヤンバルはもはやローカルな存在としてではなく、われわれの社会的属性すべてに関わってくる領域となったからだ。

それは、中国において農村再建運動に関わる温鉄軍がインタビューで語っていたことで教唆してくれる。すなわち共同体の破壊、農民の破壊、そして農業そのものの破壊である[温, 2006:60]。戦後の軍事植民地化はヤンバルの共同体、農業の破壊であり、人的搾取をともなっていた。しかし、かつてヤンバルから搾取することを社会的なシステムと化していた軍事基地(および植民地都市)が、いまやグローバルな再編のもとに物理的破壊装置としてヤンバルの地域社会と少女の身体の上に押し掛かろうとしている。

ところで、われわれは日常の言語行為において「ヤンバル」という名称をもち出すとき、実際にはそれを既知のものとして、つまり自明なものとして使用しがちである。だが、じつはその行為自体が対象を漠然と構成しながらの作業であり、既存の区画定規を知の工具箱から出し

た段階にすぎない。たしかに『沖縄大百科事典』（下巻）から索引してみても、ヤンバルは「沖縄本島北部、国頭郡の俗称」という区画上の定義、「島尻を『下方』、中頭を『田舎』」という呼称関係における定義、そして『金武節』などの俗謡詞から抜粋することもできる〔沖縄大百科事典刊行事務局編、1983：764〕。これらの定義は「自然村」とか「第一のムラ、第二のムラ」（神島二郎）の思考回路のもとで描けば、ごく自然な定義形態であろう。

だが、それは対象を他者化し、構成し、記述するということではあっても、ヤンバルを表象すること、百科事典的に集成すること、すなわち書くという行為（エクリチュール）に内在する意図（intention）が表明されていない。E.サイードが言うように、エクリチュールは意図から逃れることはできない〔Said, 1975=1992：99〕。ましてや、95年以降のヤンバル、そして2005年に日本国政府から差し出された「米軍基地北部集約案」が典例のように、まさしく政治的に空間化された（および空間的に政治化された）ヤンバルをもって、意図を排除して書くことなど不可能である。逆説めいたことをいえば、エクリチュールの渦中において意図を排除し無効化しようとするほど、きわめて政治的脱色化の意図を孕んでいることが露呈してしまう。

ヤンバルという錯綜体、書くという錯綜体

では、そこでヤンバルを書くということの困難さと意図の含有を承知のうえで、あえてエクリチュールの渦中に飛び込むとしたら、どのような方法が可能であろうか。紙幅の関係上、詳述することは困難なため、それはヤンバルを錯綜体として捉えるということに意図と方法を設定することで一括説明することにする。

本稿でいうところの錯綜体とは、大橋健一の「錯綜体都市」に関するゆるやかな定義を概ね参照している。大橋によると、『都市／地域』、『グローバル／ローカル』がせめぎあい、交錯するダイナミックな『場』としての現代都市を捉える」手がかりとして、まずこの概念を提起している。しかし、これがたんに現代都市のリアリティを説明するための概念に留まるものではないことは、大橋のフィールドの事例を見れば即座に分かる。「グローバル・ディアスポラ」としての香港人アイデンティティの再定義化、グローバルとローカルが連携するチャイナタウンとその閉鎖性を打破するサイバースペースなどがそれだ。すなわち「錯綜体都市」とはグローバルとローカルのベクトルが相互に孕むジレンマを踏まえたうえで、そのバイナリズム（二項対立図式）を超えた開放性の回路において、「都市」のリアリティを捉えようとするところに特色がある。それは、一国主義モデルや都市構造論／地域社会論という対立を超えて「捉えようとする」意図をもって、「構想」するためのエクリチュールでもある〔大橋、2003：107-126〕。

もちろん、この「錯綜体都市」という概念を本稿小特集のヤンバルに関する記述にそのまま援用することはできない。だが、先述したように共同体、農民、そして農業の破壊を強力に遂行させた沖縄戦と軍事要塞型の都市化、さらに95年以降の政治的空間化によって、ヤンバルはたんにローカルなものとして記述することができない他者となった。グローバルな編制のベクトルを孕みながら、ローカルな局所のベクトルへと引き裂かれる暴力（つまり「地に呪われた者」をうむ植民地主義的实践）のなかで、この差別の境界を跳躍するためのヤンバルを意図し、構想する記述を開始することが「錯綜体」概念を援用する根拠である。

しかし、その大橋の概念をもってしても、まだヤンバルに関する記述の意図を表層において書いていることにしかならない。それは、グローバルだとかローカルだとかの空間的な交叉や広がりやヨコ糸として紡いでいることでしかない。それは記述という行為の中で戦略的に空間を編成し直していく開始点には十分であっても、じつは〈わたし〉を聖域化したままヤンバルを他者化するだけに留まり、局所を形成し、論理（意図、構想）の展開を終着させることになってしまう。そこで、「錯綜体」概念にはもう一つの意味を付与していかなければならない。

それはサイドがL. ヴァレリーの考案した〈*implex*〉を援用して、エクリチュールそのものを「錯綜体」として捉えた方法が必要なのだ。サイド（そしてヴァレリー）による「錯綜体」とは、〈わたし〉の記述行為が歴史的・社会的圧力に支配されるということ。しかし、なおかつ偶然的・拡張的に疑問と回想にひらかれ、単一図式に包摂されない出発点（beginnings）を含意する記述行為であろうとすることだ。たとえば、ヤンバルに関して筆者がどんなに断言的に書こうとも、それは〈わたし〉という社会的・歴史的に支配される記述行為の慣例と意図のなかでのヤンバルでしかない。サイドの言葉を借りれば「私たちがどんな断言をしようとも、私たちは何をあるいはどれだけ断言しているのかは決して分からない」のであり、つねに未決、未知の事象を残しつつづけるということである [Said, 1975=1992: 99 - 100]。

サイドは、S. フロイトによる精神分析の場面における診療行為にも、複雑な洞察としての錯綜体というまなざしを援用している。つまり、分析者は患者の妄想を言語的、分析的に構築しようとし「分からせようとする」のだが、じつはその行為そのものも構築の準備作業であり、妄想でしかない。しかし分析者が言語構築という妄想を意識化し、主体と客体とを往還しながら対象に関する記述を開始した瞬間、はじめて分析者と患者との間に診療行為の共通の土俵ができるのだとする（だが、やはり始まりでしかないのだが） [Said, 1975=1992: 89]。

記述行為としての錯綜体も、このフロイトの洞察と同じように未決、未知の領域を残しつつ妄想的に言語化（「転移」）しながら、行為主体（記述者）のポジショナリティとその社会的抑圧からの解放を開始する準備作業となる。書くという行為は言語化であり意味を表象や定義として安定した樹木のごとく着地させたがるのだが、しかし錯綜体とはそこからさらにリゾーム（根茎）状に増殖させていく記述行為である。そのとき、やはり〈わたし〉の社会的な言語（分

析者の言語)が問われてくる。まだ見ぬヤンバルを書くという行為は、まだ見ぬ(わたし)を書くということだ。そうしなければ、今日の抑圧的・搾取的に政治化されたヤンバルという空間を、私たちはまたもや非対称的な他者として、つまりたんにローカルな問題として監禁してしまう。

〈わたし〉がヤンバルを書いた始まり

そろそろいい加減にヤンバルについて書くという作業を開始しなければ、結局は何もはじまらないし小特集という形象からかなり逸脱しそうだ。さて、筆者がヤンバルの対象構成をはじめたのは、もちろんヤンバルという呼称を認知してからになるであろうが、学問上の対象構成としては先述したように「社会学」という道具を手に入れ、対象について書くことを許可された卒業論文が最初になるであろう。「都市社会学」をプロパーとして明確な境界線を保持していた〈わたし〉は、地理的領域としてのヤンバルを直接対象として取り上げることはなかったし、ありえないことであった。しかし、卒業論文において那覇都市圏の同郷者ネットワークを個人の生活史をもとに対象構成していくと、必然的にヤンバル出身者に突き当たる(もちろんヤンバル出身者だけではないが)。

じつは、学部学生レベルの学力においてすら、もうすでに対象構成に関する他者化の様式があるていど身につけているのである。都市社会学で度々批判されるころの都市—農村二分論(あるいは都鄙連続体論)は「都市」という現象を領域的に捉える知の様式や、urban-ruralとかurbane-rusticという生活のありようをバイナリズム的に捉える知の様式に支配されている。つまり「都市」という現象を分析対象としていくばあい「非都市」という設定がオートマチックに発生し、さらにオートマチックに「非都市」と設定されたものが除外されてしまうか、「例外」「特殊」「地域特性」として処置を受けるという現象だ。

結局のところ、筆者もヤンバル出身者のネットワークを「第一のムラ」から「第二のムラ」へ、あるいは「都市の中のムラ」論として処置してしまう思考作業を繰り返していた。つまり、郷友会社会のモザイクとしての那覇都市圏は第二のムラによるコミュニティの再生で構成された多様な社会という捉え方だ。

M. ウェーバーによる北欧社会をモデルとした「都市」類型、そしてロックフェラー財閥による高額なスカウト行為で誕生した1920年代アメリカのシカゴ大学とそこを創始とする都市社会学は、そのような同化と調整の保守的イデオロギーでエスニック・コミュニティを構成する様式を伝播させた。そのような知の様式を持ちあわせた〈わたし〉が「都市」という現象の解析を沖縄に置換してみたばあい、ある重大なまなざし(対象構成の方法)が欠落してしまうことになる。筆者がそれに覚醒しはじめたのは、もっと後のことである。

繰り返しになるが、プロパーを強調し境界を固定する性向を保持したままの筆者は、1993年より大学院進学のために学業、研究、生活の拠点を東京に移すことになる。まさしく、バブル経済の最終章、外国人労働者の急増と地域の多層化・多国籍化、そしてエスニック・コミュニティ、エスニック・ネットワーク、エスニック・ビジネスなど、都市社会学領域でもエスニシティ研究が百花繚乱と咲き乱れたころの上京である。そして、そのアカデミック・マーケットにおいて「売れ残り商品」とならないために、筆者は県外大都市に居住する沖縄出身者のネットワークとコミュニティについての対象構成、フィールドワーク、データの記述をこなし続けた。つまり、都市社会学のマーケットとシカゴの知的伝統様式のなかで沖縄人を考察していく場合、もうすでに「ネットワーク」とか「コミュニティ」が大前提のごとく設定されていた。それは、卒業論文の段階でも同じ思考様式にあったはずだ。

それはもちろん「第一のムラー第二のムラ」「都市の中のムラ」として単純にバイナリズム的に取り扱うことで、複雑な都市社会の構造や過程を理路整然と分節化することができ、説明がつくことの精神安定剤を得る快楽もあったからに違いない。しかし、厄介なことは「都市の中のムラ」とか「沖縄出身者同士のネットワークやコミュニティ」という自然発生性ではない、沖縄をめぐる明確な政治性に突き当たったことだった。敗戦直後の沖縄人連盟の組織化表明、そしてGHQによるアカ狩りの一環としての朝鮮人連盟に対する弾圧と沖縄人連盟の急速的な「県人会化」、そして復帰運動論の展開という一連の動きである。さらに戦前期には1923年の関東大震災と朝鮮人大虐殺、そして1925年の治安維持法制定という暗雲たちこめる社会的な情勢のなかで沖縄人集住地域において県人会が組織化され、それから間もなく沖縄語や沖縄的慣習・習慣の矯正または撲滅という生活改善運動が同郷組織を中心に拡大展開していく〔桃原、2000：54-60〕。

以上の一連の歴史的な動きを踏まえ、筆者が大学院生時代に展開した沖縄人集住地域・川崎や横浜鶴見での踏査行為とその記述のなかで、沖縄におけるヤンバルという領域の位置づけが大きく転換をむかえていた。社会科学のパースペクティブとして当然なのだが、「集住地域」と言っても現実は一枚岩ではないということ。つまり、川崎の中島地区を中心とした沖縄島中南部出身者集住エリアからやや距離をおくように、より臨海工業地帯に隣接する浅田・小田地区は横浜鶴見と地続きのようなかたちで名護、本部、今帰仁出身者が多くを占めているという明確な境界線があるということだ。戦前（あるいは戦中）、そして戦後へと一貫して、沖縄島中南部出身者と北部（ヤンバル）出身者とのあいだに、明らかに集住という生態や空間をめぐるアイデンティティの政治とその緊張関係、そしてそれらを包摂し統合しようとする沖縄人エリート層との権力関係を垣間見ることができる〔桃原、1996：84-87〕。

しかし、このアイデンティティをめぐる空間の政治を論として展開するなかで筆者が陥った最大の学問的愚鈍は、そのコミュニティと運動の構造や統合的側面にのみ執着してしまつてと

いうことだ。沖縄島中南部出身者と北部出身者との間に集住空間の断絶を「発見」することはできたし、それを「一枚岩ではない多様性」とか「モザイク」とか「構築された沖縄人」などと表現することは容易であった。だが、それでも何か釈然としない、表層をなぞるだけの説明という領域を脱していない感がその後しばらく残滓としてあり続けた。

その残滓は今も筆者の体内に居座り続けている。だが、沖縄（あるいは沖縄人）という存在と場所を学問とかプロパーという特権で他者化しつづけてきた筆者は、その残滓の成分のさらにアトムレベルに潜んでいた毒汁を反芻することになってしまうことになる。その毒汁が何ものかを説明することは困難であるが、この毒汁をもってこそ（本質など分からない）沖縄とか沖縄人に接近する、そしてこれを書くということに突き当たるのだ。

〈わたし〉の毒汁を抽出したもの、それは貧困と暴力、1995年、ヤンバル、そして沖縄への帰郷であった。

ディアスポラと抵抗の沖縄

まず、筆者が突き当たった沖縄とは戦前期（とくにソテツ地獄期）に大都市集住地域に離散した沖縄人農民だ。ソテツ地獄期における沖縄のサトウキビ農家の家計状態は、一樽約17円の120斤砂糖樽を50樽ほど売りさばき年収850円を得る中層農家ですら、燃料代、肥料代、樽代、運搬費のコストであまり糧を得られない。それを補助する目的で住み込み下男の賃労働に参入する次三男たちも年収は約20円、女性たちは家内制生産労働のアダン葉帽子を編む賃労働でひと月2円でいどしか家計を補助できない。

そして筆者が次に突き当たった沖縄とは、富国強兵・殖産興業のイデオロギーが回路のように集積するマザーボード（帝都）から低廉人権資源の獲得ために沖縄に流布する情報、すなわち集住地域における「月給27円」「紡績女工では10円余」という情報であり、「鶴見売り」という人身売買である。とりわけ紡績女工と「鶴見売り」はヤンバルで社会現象化するが、ソテツ地獄期の沖縄を想起すれば沖縄島の空間（階級）格差を強調することや農民・農業・共同体の破壊を局所的に記述するとはあまり意味をなさない。

そして、この大多数の農民・農業・農村出身者が関東大震災で見たものは、朝鮮人大虐殺と「沖縄的なるもの」への暴力の予感であった。関東大震災の最中、使用言語や相貌を基準に朝鮮人狩りに沖縄人が巻き込まれ、虐殺の恐怖を体験したものは少なくない。沖縄人エリート層や集住地域リーダー層によって構築された「沖縄人（アイデンティティ）」という見方だけではない、たしかに沖縄および沖縄人が存在する場と身体があったはずだ。

そして地上戦によって徹底的に農民・農業・共同体を破壊されたのち、米軍によってさらに破壊と強奪が展開した戦後において、沖縄人たちを物理的、社会的、精神的に離散させる状況

／情況が深く切り込んできたことは周知のとおりだ。1960年代以降の日本における高度経済成長も、華やかな東京オリンピックも、沖縄人青年たちにとっては「県外就職」というかたちで体験した植民地沖縄への絶望であった〔桃原、2003：304－308〕。1995年1月、横浜で見かけた「沖縄の人、お断りします」という貼紙のカラオケパブが〈わたし〉の網膜に焼きついている。それからわずか9ヵ月後、沖縄島北部で発生した12歳少女に対するあの事件だ。

たんに沖縄人を構築－脱構築の図式では捉えられない、そしてアイデンティティの政治とか戦略とか日常実践では記述できない領域がある。F.ファノンの言葉に幫助してもらえば、沖縄人はまさに、あるのだ。それは近代以降の日本による琉球処分から端を発し、ディアスポラ（離散住民）と化した状況／情況、また暴力とそれに対する恐怖、虚脱、絶望、そして抵抗のなかで表明する沖縄人である。

95年のあの事件から「SACO合意」を経て、「県内移設」という新たな始末に落ち着いた普天間を横目に筆者は帰郷する。湧いては消え、またそれを繰り返す95年の残像をもってしても、否応なしに記憶から掻き消そうとする日々だけが続く。そんな中、2004年8月13日の事件をむかえる。もはや、ヤンバルだけに苦悩を押し付ける状況ではない。そしてヤンバルを他者化し、彼岸として記述する段階ではない。「鶴見売り」と「紡績女工」、北部における軍用地としての土地強奪、そして中部の軍事植民地型の都市化とヤンバルの農民・農業・共同体の破壊。もはや空間と時間を問わずヤンバルという存在が混淆とした日常となって、〈わたし〉の身体に切り込んでくる。都市社会学というプロパーのなかで〈わたし〉が無視し、残余カテゴリーとして始末しようとした、あの厄介でシンドイ、沖縄人という塊となって〈わたし〉の身体に切り込んでくる。

学部学生時代、卒業論文作成過程で出会った大宜味出身の老女はかつて川崎の紡績女工であった。那覇で出会った伊江出身者は軍用地として農地を奪われ、母親が独居する島の生家では庭先を米軍装甲車が跋扈する。紡績女工の経験とその語りの一編も、長寿で元気な「オバア」に収束した。装甲車が行き交う日常に暮らす母への想いも、緊密な伊江出身者の同郷会活動に収束した。どのライフヒストリーも、「モザイク的な」那覇都市圏のコミュニティとネットワークを描くためのナラティブで論を閉じたのである。そのとき〈わたし〉は何を排除し、何を構築しようとしていたのだろうか。

再び〈わたし〉がヤンバルを書くことの政治へ

小特集の主旨を鑑みると、本稿はそこから大きく逸脱し、「結局、ヤンバルに関することがあまり書かれていないではないか」というお叱りを受けそうな、とりとめもない記述となってしまった。だが、筆者が獲得してきた都市社会学の概念道具とアカデミズムの正統性がもたら

す抑圧を看取しつつ、その解放へとむけて記述するためには、既知の対象としてヤンバルの表層をなぞるように記述することでは困難だ。近代以降の沖縄における植民地主義は、「いま」も〈わたし〉を領土化しつつあり、植民地主義の実践に〈わたし〉の身体と精神を動員し接合させる。そして、あからさまな植民地主義ではなく、意識化が困難なポストコロニアリズムの実践に、都市社会学の概念道具やアカデミズムのカノンが加担していたことを告発していかなければならない。

この困難な〈わたし〉を記述していく作業の中でヤンバルを手がかりとしながら、筆者を一定のベクトルに布置しようとするパワーの全体像を引っ張り出していくしかない。ここでザキヤ・ダワードを引用した鶴飼哲から再引用することで、〈わたし〉とヤンバルを書くことの意味図と方法を記しておきたい。すなわち「あらゆることがつながっていて、一本の糸を引っ張ると糸玉の全体が出てきてしまうような」記述の方法である〔鶴飼、2005：39〕。

そのような「一本の糸」は、ヤンバルを記述するということに限定できるものではないし、するべきではない。まるで頑強な樹木のように君臨するこの島のナラティブ（物語）のあらゆる幹（場所）と年輪（時間）からは、無数の側根（ひげね）が治まりきれずに飛び出している。その一本の側根を引っ張ると、大地を切り割りながら地中から次々と根茎が這い出てくるのだ。そのとき、頑強な樹木は繊維状に瓦解し大地に倒壊する。

繊維状に瓦解した樹木の欠片はいずれ集積し、再び大地に根をはり、再び樹木として君臨するであろう。しかし、「一本の糸」や側根は、居場所と時間を取り戻すかのように、いつでも、どこからでも飛び出している。それらは決して隠蔽できない、始末がつかない、やはり歴然とあるのだ。いまの〈わたし〉にとって、ヤンバルを書くことに以上のような政治をこめている。

【参考文献】

Fanon, Frantz, 1961, *Les Damnés de la Terre*, La Découverte (=1996、鈴木道彦・浦野衣子訳、『地に呪われたる者』、みすず書房)。

松本通晴他編、1994、『都市移住の社会学』、世界思想社。

大橋健一、2003、『『錯綜体都市』のリアリティー—池袋～香港～神戸～ソウルを結ぶもの—』、渡戸一郎他編、『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ』、明石書店。

沖縄大百科事典刊行事務局編、1983年、『沖縄大百科事典』（下巻）、沖縄タイムス社。

Said, Edward W., 1975, *Beginnings: Intention and Method*, Georges Borchardt Inc. (=1992、山形和美・小林昌夫訳、『始まりの現象—意図と方法—』、法政大学出)。

桃原一彦、1996、「地域社会システムとしての『沖縄コミュニティ』—川崎における同郷人結合の変容から—」、『東洋大学大学院紀要』（第32集）、東洋大学大学院社会学研究科。

桃原一彦、2000、「大都市における沖縄出身者の同郷者結合の展開—集住地域・川崎を中心に—」、月刊『都市問題』（第91巻・第9号）、東京市政調査会。

桃原一彦、2003、「都市的身体の表象化と沖縄人ネットワーク」、渡戸一郎他編、『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ』、明石書店。

鵜飼哲、2006、「『第三世界』の長い夜—2005年フランス『郊外蜂起』からの遡行の試み—」、季刊『前夜』（第I期6号）、影書房。

温鉄軍、2006、「グローバリゼーションと中国農村—文化運動としての郷村建設—」、季刊『前夜』（第I期6号）、影書房。